

摘録「書誌の学苑にあそぶ 戦後日本書誌精粹」

図 書 館 長
山 野 博 史

本稿は、平成11年11月18日（木）、関西大学総合図書館3階の図書館ホールで開催された第4回関西大学図書館セミナーにおける、関西大学名誉教授谷沢永一先生と私との対談記録を要約し、一部内容に加筆したものである。

セミナー開催を周知する案内状に私はこう書いた。

「電子メディアの急速な普及と技術革新とによって、図書館で、新刊書店や古書店で、そして家庭でさえも、有力な書誌情報がたちどころに検索できるようになって、各種資料の蒐集、整理の便が飛躍的に増大しつつあります。

けれども、ふと立ちどまって、じっくり考えてみると、便利さにかまけて、大事なことを見うしないかけているのではないかと自省する人もいるにちがいません。

てっとりばやく入手した情報はあてになるのかどうか。宝の山にめぐりあえたとひと息ついても大丈夫だろうか。一步ふみこみ調べを進めてみて、期待を裏切られた場合、ほんとうに役に立ち、信頼できる書誌に基づく検索システムなら、もっと使い勝手がよいはずなのにと悔いが残るのではないか。さしあたり探しあてた書物なり資料なりを土台にして、めあての課題や人物の奥の院に迫ろうとすると、筋目をわきまえた本格派の文献目録が待ちかまえていてくれたら、どんなに心づよいことだろう。

地力を備えた書誌情報に的をはずさずまっすぐに近づくための勦を養い、腕を磨き、眼を肥やすのになにかうまい方法はあるのか。その実際的な試みのひとつとして、戦後日本書誌学史上の労作、あるいは書誌というものの大切さを承知している書物随筆の傑作をいくつかとりあげ、その真髄にふれながら、あるべき書誌の姿をたずねて、話に花を咲かせようとするのがこのセミナーの眼目です。

日夜手作業で面白くてためになる書誌づくりに精励してあくことのない人も、電子メディアの書誌情報検索システムの新機軸の開発に余念がない人も、

冊子目録であれ電子メディアであれ、気持よく活用できる書誌の登場を切望してやまない人も、ともにみな、熱い関心を寄せていただけるのではないかと考えて、この企画を実現する運びとなりました。

大方のご理解とご支援を何卒よろしくお願い申し上げます」

当日の来聴者は、関西主要国公私立大学等図書館関係者17名、新刊書店ならびに古書店関係者8名、一般市民14名、関西大学の教員4名（名誉教授2名を含む）、関西大学文学部学生3名、関西大学図書館職員27名、図書館以外の職員3名で、合計76名であった。

対談は午後2時から3時間半に及んだが、話の順序にしたがって、その概略を報告する。対談でのやりとりを再現するのではなく、私どもふたりにとって注目すべき論点はなんであったかに焦点をしばって略記したことをあらかじめ断っておきたい。

このようなかたちでの採録を諒とされた谷沢永一先生に深謝申しあげる。以下、文中敬称略。



1 はじめに

この対談のねらいについての簡単な紹介。上記案内文の趣旨と重なるので、くりかえさない。

2 書誌づくりの関大水脈点描

多年にわたり、関西大学図書館の図書課長をつとめ、近代日本書誌学史上、卓越した巨人ともいうべ

き、天野敬太郎。その影響を受けた、かつての図書館員に、日本におけるマックス・ウェーバー書誌、日本におけるポール・ヴァレリー書誌を独力で編纂した竹内市子や『明治文化研究会事歴』（昭和41年10月20日 関西大学国文学会）の編著がある田熊渭津子がいる。

教員に移ると、『河内本源氏物語』の研究で一時期を画しながら、関西大学講師のみで学究生活を終えた山脇毅^{はたす}。「広瀬本万葉集」を架蔵する広瀬捨三名誉教授。これを『校本万葉集 別冊1-3』（平成6年9月8日～11月8日 岩波書店）に影印復刻するのに貢献した木下正俊、神堀忍両名誉教授。『雑書雑談』（昭和58年3月10日 汲古書院）の著者で関西大学図書館にその「文庫」がある中国文学者の増田渉。『四書五経』（昭和40年6月10日 平凡社東洋文庫。『四書五経入門』と改題して、平成12年1月24日 平凡社ライブラリー）の竹内照夫。『伊勢物語』、『古今和歌集』の権威で『日本古典籍書誌学辞典』（平成11年3月10日 岩波書店）の編者のひとりである片桐洋一文学部教授。同辞典の項目執筆者である水田紀久、肥田皓三はともに元文学部教授。東洋史の大庭脩名誉教授も寄稿している。

冒頭に掲げた天野敬太郎、近世文学の泰斗、中村幸彦、近代日本の経済学に関する書誌学的研究の第一人者、杉原四郎名誉教授、近代日本文学の文献目録作製の雄、浦西和彦文学部教授については、以下に項目を立てて扱うことになる。

浦西和彦門下で、『宇野浩二文学の書誌的研究』（平成12年6月20日 和泉書院）で世に出た増田^{ちか}周子徳島大学総合科学部専任講師のような気鋭の学究の台頭が著しいが、後学のひとびとがこの関大書誌学徒の列伝につぎつぎと名を連ねるよう、つよく念願する。

3 天野敬太郎（1901 - 92）

天野敬太郎とはいかなる怪物であるか。処女出版は昭和2年3月30日の『法政経済社会・論文総覧』（刀江書院）。昭和3年10月15日に『法政経済社会・論文総覧追篇』（刀江書院）をつづけて公刊。四六判、二冊で合計1943ページに達する。明治に日本の学問が始まって以来、法政経済社会に関するあらゆる文献を全部ピックアップして記録し、さらにそれをテーマ別に明細に分類し、なんのテーマでだれがどんな論文を書いているかを正確に把握できるように作った。時に数え年27歳のころ、京都帝国大

学司書（図書館）、法学部兼経済学部の資料室勤務といった地味な境遇にありながら、精励を惜しまなかった。昭和8年11月20日には、『本邦書誌ノ書誌』（間宮商店）を出版。これが昭和48年11月から昭和59年5月にかけて刊行された晩年のライフワーク『日本書誌の書誌』（第1巻 - 第2巻 巖南堂書店。第3巻 - 4巻 日外アソシエーツ）、一卷本著作集『書誌作品論考』（昭和54年4月5日 日外アソシエーツ）などに結実する。

最高傑作は、昭和31年3月25日刊行の『河上肇博士文献志』（日本評論新社）。河上肇の著作をすべて種類別にかけて、編年体で出典を明記しているが、特筆すべきは、論争に明け暮れた河上肇の人と学問の特徴をよくおさえて、論争目録という項目を設けていること。

個人書誌の開拓者として、みずからの書誌づくりにたえず創意工夫をこらし、ねばりづよく仕事を遂行して怠ることがなかった。

4 中村幸彦（1911 - 98）

昭和15年3月、天理図書館司書となり、古義堂遺書の整理に従事し、昭和19年6月25日刊行の『仁斎書誌略』（天理図書館叢書第14輯）、昭和31年3月26日刊行の『古義堂文庫目録』（天理図書館叢書第21輯 天理大学出版部）の編輯者として中心的役割を果たしたが、この労苦は朽ちることがない。重要な事実はもらさず解題に記載するのだけれども、簡潔を旨とする中村書誌学の基本姿勢のみごとな実例を『古義堂文庫目録』で示した。書誌学的表現方法のひとつの発明者と位置づけてよいだろう。ひとが見向きもしないような近世の雑書を多方面にわたって蒐集し、それらを照らしあわせて勉勵する鋭敏な感受力の持ち主であったため、理屈倒れの書誌学に陥ることがなく、独創的な書誌学を展開してとどまることを知らなかった。読本や人情本、漢詩文や近世和歌など、中村学を支えた旧蔵の古典籍ほか全図書資料は、平成10年7月、関西大学図書館に譲渡を前提として寄託され、「中村幸彦文庫」の整理と公開によって、その学恩に報いることが焦眉の課題となっている。

「金で本が集まるものでは決してない」、「実証的に事を進めてゆく処と、勘を働かさねばならぬ処がある」、「現在の教官の中には古写本や書誌に弱い人が、案外多いのが、戦前の大学と違う処である」、「私は学校を出て以来、長く図書館勤めをした。そ

の間中も、更に図書館から離れてからも、各地の文庫の整理や目録の作成に参加することが多かった。従って、図書館や諸文庫のこと、そして書物の成立や著者の考証など、更には出版や目録にふれて、筆を執り、時には講演を強いられることも、段々にあった。しかし、書誌学、図書館学に専念したことはない」など、書誌にかかわって示唆深く忘れたい中村幸彦語録は少なくない。その仔細については『中村幸彦著述集』全15巻(昭和57年6月10日~平成元年7月20日 中央公論社) わけても第14巻「書誌聚談」(昭和58年3月30日)が委曲を尽している。

5 長澤規矩也(1902 - 80)

中村幸彦が書誌学者面を絶対にしなかったのにたいし、若年のころから、書誌学をやるんだと肚にきめていたのが長澤規矩也である。

昭和12年12月31日刊行の『安井先生頌寿記念 書誌学論考』(松雲堂書店・関書院)は、単行本の表題に「書誌学」をうたったもっとも早い例ではないか。のちにこれにあきたらず、より明確に「図書館学」という考え方に達し、そのひとつの大きな仕上げとして昭和54年1月20日に公刊したのが『図書館学辞典』(三省堂発行 汲古書院発売)。この新書判の一冊のなかには、長澤自身の意に反して、いま書誌学というけれども、書誌学に必要な和漢の用語はすべて入っている。各用語の説明の仕方の簡潔明瞭さは絶品といってよい。

有名な「装訂」の項の説明で、「装釘」や「装幀」を誤用と断ずる文章など、小品ながら、名随筆の趣が感ぜられる。これほど安くて役に立つ辞典はそうざらにあるものではない。

青年期に着手し、晩年いっそう精力を傾注した公私の文庫や図書館の蔵書目録、善本の解題づくりには、瞠目すべきものがあり、ほとんどの場合、自腹をきっていることから明らかなが、とにかく私心のない人で、書誌学が好きで好きでたまらなかったにちがいない。

昭和51年11月20日発行(昭和62年7月25日 再訂第六刷)の『古書のはなし 書誌学入門』(富山房)もまた、書誌学上必要不可欠な用語や手法について簡潔に書いた本だが、これらに先立つ『支那学入門書略解』(昭和5年5月初版。昭和15年7月20日新訂版 文求堂書店)がよく示しているように、いずれも大冊の体裁をとらず、概して小著のかたちをとっているのが好ましい。たいていの学者は知っ

ていることをたくさん書きたくなりがちなのに、それを削ってゆくことに苦心したのが長澤規矩也である。

『長澤規矩也著作集』全10巻・別巻1(昭和57年8月20日~平成元年7月25日 汲古書院)、『図書館参考図録』第1輯 - 第5輯(昭和48年8月~昭和52年11月 汲古書院)などによって、その仕事の全貌を知ることができるが、大上段にふりかぶった研究を前面に押し出すことなく、目録づくり、解説、解題に根気よく取りくんだ人である。関西大学図書館は、その旧蔵の主として漢籍からなる「長澤文庫」を所蔵、整理中であることを付記しておく。

6 中野三敏(1935 -)

若いときから中村幸彦に傾倒し、同時に中村幸彦も中野三敏に期待し、のちに中村が九州大学文学部教授を退いたとき、その後任として赴く。中村学の代表的後継者のひとりで、中村幸彦同様、人がやらないところを綿密に追求することでは随一。主として近世中期の文藝思潮の研究に努力を重ねている人で、この人もまた、身銭を切って書物を蒐集する点にかけては、ずばぬけた存在である。

江戸中期といういちばんの空白時代に眼をつけた卓抜な初の論文集が、昭和56年2月20日に上梓した『戯作研究』(中央公論社)。書物が好きで書物に詳しいという自らの本領を發揮した快著が、平成7年12月6日公刊の『書誌学談義 江戸の板本』(岩波書店)である。もとは「新日本古典文学大系」(岩波書店)月報に連載されたもので、近世の書物を調べるのに必要なことは全部書いてあるといってよい。これまでの書誌学の書物はせいぜい、いわゆる室町以前までしか扱っていなかった。近世は書誌学の対象外と見なされてきた。それをあえて取りあげた。しかも、その証明、解説の仕方がまことに入念で、微にいり細をうがっているだけでなく、独自の提案も随所に見られ、その書物に関する鑑識眼、書誌学に対する見識には、間然するところがない。それに、読ませるのである。筆が立つのである。近世の書物の世界が秘める複雑怪奇さをこれくらい面白く読ませることができるのは、たいへんな力量。名人藝と呼びたくなるような、あっぱれな筆さばきには感服するほかない。たえず書物を手にとり、正面から向かいあい、鋭敏な学識を支えに新機軸を打ち出し、気持のよい遊び心を忘れず、物学びの大道を歩む。中村幸彦の人と学問を想起するときに感ずるのと同

じすがすがしさがみなぎっているのである。筋目ゆかしき勉強家とは、こういう風情にみちあふれている人のことをいうのではないだろうか。

7 林 望 (1949 -)

慶應義塾大学文学部教授で、同大学附属研究所の斯道文庫長であった安部隆一に師事した戦後生まれの書誌学者。書物について簡潔に記述するにはどうすればよいのかを勉強して、おのれの基礎を形成した。

平成3年にピーター・コーニッキーとの共編著『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』(ケンブリッジ大学出版部 八木書店発売)を世に問い、この労作によって、国際交流奨励賞を受賞。この仕事においても、いかに少ないスペースで、その書物に関する必要最低限の情報を記述するかに心を砕くことになる。

英国留学から帰国してのち、平成3年3月11日刊行の出世作『イギリスはおいしい』(平凡社)で第39回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞してからというものの、名エッセイストとして確固たる地位を築いている。

林望によれば、書誌学は、書物それ自体をオブジェクトとして「比較と観察」を重ねていくことによって、一つ一つの書物を正確に「認識」していく学問にほかならない、と定義される。その認識が究極の目的になっているという面があって、そのところは中野三敏といささか異なるが、書誌学についての林望自身の見識を披露したのが、平成7年7月18日出版の『書誌学の回廊』(日本経済新聞社、『リンボウ先生の書物探偵帖』と改題して、平成12年3月15日 講談社文庫)である。

書誌学に志したころ、ベルリンの国立図書館での話。ありふれた本をもれなく相互に比較することをめざしていたという。このありふれたものをきっちり認識することの大切さは、中村幸彦の主眼点でもあった。たとえば、江戸時代を通じてこれほど流布した本はないのではと思われる『古文真宝』。この書物を一つのオブジェクトとして見てみると、みな違うのである。だから、『古文真宝』を一生懸命に集めるのは、江戸時代の雰囲気を書誌学的に身につけることを意味するわけで、一事が万事、林望は学問としての書誌学を提唱しているのである。この人の最大のお手柄は、その好エッセイに親近感を寄せる一般読者の関心を書誌学に大きく近づけたこと

にあるかもしれない。

8 反町茂雄 (1901 - 91)

日本の古書業者の空前絶後の大物である。昭和7年9月、古書肆弘文荘開業。ただし、店は持たない、人は雇わない、借金はしない、そして、室町以前の日本の古典籍のよほど珍しいものだけを取り扱う。そこらの本や雑誌は一切扱わない。平成3年9月4日に亡くなるまで、59年間に売った本は3万点。わけても、昭和22年から26年にかけて、日本の国宝級の古典籍が古書市場にあふれ出る。華族や大地主など、それまで文化財を持っていた人たちが財産税でしごかれて、売らざるをえなくなり、一挙大量放出となった。それを反町茂雄が網にかけてもってゆき、しかるべきところへ売る。この間に6千点の本を売っている。文化財が170点、むろん国宝もある。そういう仕事を生涯つらぬいた。

特筆すべきは、天理教二代真柱、中山正善とのめぐりあい。最大の買い手であった。昭和2年3月、東京帝国大学法学部政治学科を卒業後、神田神保町の一誠堂書店に住込み店員として入るが、ここでの修業中、昭和3年12月28日の夜、中山青年が初来店。この運命的な出逢いを機に、古典籍について猛勉強を開始する。ほんとうの独学者なのである。中山正善に、古典籍はいかに宝物であって、蒐集に価するかを長年かかってこんこんと教えこみ、珍品の購入をすすめる。中山正善もよくこれにこたえた。

このような波瀾万丈の回想記の傑作が、『一古書肆の思い出』1 - 5 (昭和61年1月14日~平成4年6月5日 平凡社。平成10年5月15日~平成11年1月15日 平凡社ライブラリー)である。その商売はすべて豪華な販売目録でやるのが一大特徴。たえず世界に通用する目録をつくらうとする意気ごみにみちていた。一冊本なら、『天理図書館の善本稀書』(昭和55年3月1日初版。昭和56年7月20日定本発行 八木書店)を繙いてみると、天理との関係に限られるけれども、自分の商売のやり方について詳細に記している。書物の売買に関してどのように信用を獲得していったかの具体例が巧みな語り口で述べられている。反町茂雄がいたから、埋もれてしまったはずの本が数知れず浮かびあがったわけで、これはもうとてつもない文化事業であった。必死に勉強し、高い値段をつけ、ちゃんと講釈をそえて逸品を売りさばくことによって、反町茂雄は古典籍の真価を社会的に認知させることに成功したのである。

9 西田^{たけとし}長壽 (1899 - 1989)

東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫(現・近代日本法政史料センター)の生みの親が宮武外骨なら、育ての親は西田長壽といつてよい。宮武外骨が礎稿を作り、西田長壽が補い、「新聞雑誌関係者略伝」と題し、昭和42年11月15日から昭和52年2月15日まで、「日本古書通信」(月刊)に103回連載されたものに増補改訂を施して一本としたのが、昭和60年11月15日公刊の『明治新聞雑誌関係者略伝』(みすず書房)である。

明治期の言論界を支えた有名無名のジャーナリストの経歴を知るうえで必携の労著。精細をきわめながら、記述は簡潔を旨としており、ふつうの人名辞典類で探索しきれない人物を含め、約2千人が採録されていて、圧巻である。

昭和5年4月から昭和39年10月まで、明治新聞雑誌文庫に35年間勤務したが、地味な黒子に徹することをいとわず、筋金入りの資料読者でありながら、それを誇らしげに見せびらかすようなそぶりもみせず、調べ物をしているときがいちばんの幸せとばかり、底光りのする研究生生活を全うした西田長壽の人生は完璧の一語に尽きるのではないだろうか。

昭和36年8月25日刊行の『明治時代の新聞と雑誌』(至文堂)、平成元年11月15日発刊の主要論文集『日本ジャーナリズム史研究』(みすず書房)など、不滅の業績である。

10 杉原四郎 (1920 -)

天野敬太郎のところへ押しかけていった、兄弟子が杉原四郎で、弟弟子が谷沢永一。天野敬太郎は気むずかしい人であったから、容易に胸襟を開くことはなかったが、ふたりの書誌にたいする尊敬の念が通じたのではないか。

杉原四郎は近代日本の経済思想史研究にとどまらず、近代日本の経済に関するあらゆる事情を、各種印刷物、雑誌の歴史等を通じて、書誌学的に探究することにおいて、余人が近寄りがたいほどのみごとな仕事をつづけて、いまに到る。

昭和47年11月20日刊行の『マルクス・エンゲルス文献抄』(未来社)はエンゲルス「共産主義の原理」とマルクス・エンゲルス『共産党宣言』との敏活な比較考察が巻頭を飾る丹念な一書。その「はしがき」の最後のほうで、「本書はマルクス・エンゲルスに関する第一次および第二次文献の解説的紹介と

いう性格がつよいので、私自身の立場が明確におし出されておらず」と述べているが、本書をはじめとする一連の著作を読めば一目瞭然、この謙抑なことばの底に、はっきりとした方法意識がひそんでいることを見逃してはなるまい。なぜ日本の経済思想や経済学はこういう足跡をたどったのか。それらは日本の近代化とどう切り結んでいるのか。ここに、杉原学全体の核心があることに留意したい。しかも、それを文人肌のゆとりたっぷりな文章で書誌学的にじっくりと検証する姿勢を崩さずに進んできたという点で、他の追随を許さない。

昭和55年3月15日出版の『近代日本経済思想文献抄』(日本経済評論社)はアダム・スミス、オウエン、J・S・ミル、マルキシズム、重農主義の主張が近代日本において、どのように受容されたかの歴史的追求の書。昭和55年9月1日刊行の『日本経済思想史論集』(未来社)では、経済雑誌関係の書誌が明細に探究されているが、この分野は杉原四郎の独壇場である。多年にわたる河上肇の人と仕事への持続的関心と研究の深化も銘記しておきたい。

本セミナー当日、来聴者のなかに、杉原四郎名誉教授の姿があり、対談者ふたりはいたく恐縮した。

11 矢野貫一 (1930 -)

『近代戦争文学事典』第1輯 - 第5輯(平成4年11月25日~平成8年12月10日 和泉書院)は既刊分千数百ページ、類書のない大作である。近代日本の多少とも戦争に関係のある文学およびその参考資料を徹底追跡し、そのすべてに解題をつけている。たんなる目録ではなく、一冊一冊について解題が記されている。内容からその書物の刊行に到るいきさつまで、ていねいに解題を施している。解題書誌学、つまり文献目録ではなくて、その内容を知らせることに重点をおいた書誌学的貢献として、現代日本で最高に位置する仕事といえるだろう。解題の対象となるものをすべて読みこんだうえで、そのポイントを描くということに注意しなければならないから、解題を書くのはむずかしい。解題が煩雑にならぬよう、いかに削るかが重要な課題となる。その際、独自の着想と工夫が問われるので、厄介きわまりないのだが、このさらに続刊が待たれる解題書誌学の金字塔は、これまで投入してきた労力をむだにせず、平板な記載に陥らず、着実に研鑽を積んで明日をめざす好例である。

12 津田亮一（1917 - ）

スイスの博物学者で書誌学の父といわれるコンラート・ゲスナー（1516 - 65）にちなんで創設されたゲスナー賞（本の本、書誌、目録・索引に贈呈。雄松堂書店）の第1回受賞作品（目録・索引部門金賞）『瀧井孝作書誌』（平成6年8月29日 私家版）の著者である（第1回ゲスナー賞授賞式は平成9年11月6日）。

瀧井孝作の全作品の著作目録をつくるのは、瀧井孝作は寡作家の部類に入るから、さほどむずかしいことではない。ところが、この書誌の一大特色は、瀧井孝作を論じた参考文献を網羅的に拾いあげるだけでなく、それら論考がなにをいわんとしているか、その要点を個別に解説しており、史上初の試みと思われる。労苦にみちた画期的英断である。読みごたえがあって、しかも役に立つことこのうえない。著作目録としても綿密であるし、参考文献の内容のエッセンスを的確に要約した目録を添えているのだから、寸分のスキもない出来ばえとなっている。参考文献目録を羅列するだけの時代は過ぎたのである。この品位ゆたかで完成度のたかい『瀧井孝作書誌』が先鞭をつけたように、これからは解題文献目録の時代がこなければならぬといっても過言ではないだろう。瀧井孝作は作品が少なく、瀧井孝作についての評論も多くないというふうな好条件にめぐまれたということはあるけれども、実に立派な優品である。

ゲスナー賞の折の津田亮一の受賞のことばを引いておく。「私は瀧井孝作先生の小説が好きで、その文章に愛着がありましたが、その文体が俳句の修練によるものとわかってからは、日本全国を明治・大正の俳句雑誌を求めて走りまわるようになりました。そのうちだんだん夢もふくらんで、著書をすべてカラーで収録したいとか、参考文献にはひとつずつ解説を付したいとか、納得のいくレイアウトにしたいとか、私家版でなければおさまらぬ仕儀と相成りました。報道畑のサラリーマン生活の傍ら、三十数年をこの書誌作成に費やしましたが、その間私はとても幸せでした。好きな作家と作品に毎日始終顔を合わせて向かい合っておられたからでした。この度の受賞を大変光栄に思います」（ゲスナー賞受賞を記念して『瀧井孝作書誌』の残部を頒布する際、雄松堂出版が作製したB5判の詳細内容見本のチラシに掲載）。

13 紅野敏郎（1922 - ）

紅野敏郎の書誌的労作の最初の成果は、昭和54年1月22日刊行の『本の散歩 文学史の森』（冬樹社）。その「あとがき」にこう書いている。「（前略）文学史の構築は、自己の文学観をタテに、一筋に、ストレートに、という強烈な方法もあり、それは魅力もあり、私もかつて参加したこともあったが、あれこれの曲折、山と谷との関係をじっくり見つめ、裾野を広げ、楽しみつつ本をまさぐり、小さな本や小さな出版社ですでになくなった小出版社、編集者をいとほしみ、つきあい、作家と作品をじっくり評価していきたい、と今では思っている。それにはいわゆる名作の類のみに力点をおかず、大家の別の一面や埋もれた人や追悼文集も大切に、文学史・文壇史・それに興味深い叢書などを企画した出版社の歴史も加えるような、欲ばった考えを持ち、随想集や画家の文章、演劇関係の文章も含め、あれこれの本をさぐってみることにした。（中略）

そうした散歩スタイルのなかから、文学史の山脈が遠く望み見られ、あるべき文学史への一つの通路が、ひょっとしたら明白に開けてくるかも知れぬ。じれったいやりかたであろうが、結構楽しく、そういう『道草』をこれからも私はつづけたい。（後略）」

こういう姿勢で、これ以降も健筆をふるいつづけ、『増補新編 文学史の園 1910年代』（昭和59年9月30日 青英舎）『近代日本文学誌』（昭和63年10月21日 早稲田大学出版部）『雑誌探索』（平成4年11月10日 朝日書林）『大正期の文芸叢書』（平成10年11月20日 雄松堂出版）など、その成果はまことに豊富で、日本近代文学研究のもっとも基本的な大作と呼ぶことができる。イデオロギー的文学史にふりまわされず、主観的作品論におぼれず、テキスト読解流行の風潮にもならず、書物としての作品の微視的観察の筆を休めず、その研究態度は一貫しており、揺らぐことがない。

紅野敏郎はいまや日本近代文学の書誌的研究の最高峰に到達したとみなしうるが、これら一連の仕事は研究のヒントを学ぶための宝庫といえるだろう。ささやかな資料のなかに秘められている微妙で多彩なニュアンスをくみとることが自分の学問と、そう肚をきめているのが紅野学の特徴であると思われる。

14 青山毅（1940 - 94）

この人は、昭和39年から昭和58年まで、20年近く

日本近代文学館に務め、それから日外アソシエーツに移り、四国女子大学助教授の職を経るなどしながら、めぐまれない境遇のなかで日本近代文学の書誌的研究に異彩を放った。

昭和45年8月17日刊行の『高見順書目』(高見秋子刊 限定私家版300部)の編者をつとめ、これに加えて、平野謙、小熊秀雄、島尾敏雄、吉行淳之介の全著書を蒐集し、それぞれの全集等で書誌や解題を作製するのに格別の情熱を注いだことで知られる。

わけでも、文学全集の研究に個性を発揮し、春陽堂版『明治大正文学全集』付録「春陽堂月報」や改造社版『現代日本文学全集』付録「改造社文学月報」などの全揃いの蒐集に成功するという離れ技を演じ、その細目を昭和53年12月28日に自ら創刊した《ブックエンド通信》に連載したことから、一部具眼の士を驚嘆させたのである。平野謙であれ島尾敏雄であれ、新聞、雑誌、月報であれ、的をしぼった書誌的探索の緻密さという点では、なにか天から授かったような不思議な能力の持ち主であった。その執念の果ての結晶の一端は、『総てが蒐書に始まる』(昭和60年11月16日 青英舎)『古書彷徨』(平成元年3月27日 五月書房)によって偲ぶことができるが、そのはやすぎる死が惜しまれてならない。

15 浦西和彦(1941 -)

浦西和彦の最初の書誌は『葉山嘉樹』(昭和48年6月15日 桜楓社)である。葉山嘉樹の年譜だけで八ポ二段組でぎっしり、120ページ。葉山逮捕時の調書とか作品に対する批評類とか、すべて引用されており、それまでの葉山嘉樹評の誤りは遠慮会釈なく正してゆく。著作目録、参考文献目録が入念なのは当然で、葉山宛書簡も復刻されていて、厳密をもって鳴る浦西書誌学の出発を告知するにふさわしい、まさに画期的伝記であった。

『開高健書誌』(平成2年10月10日 和泉書院)など、名品は少なくないが、代表作は『日本プロレタリア文学書目』(昭和61年3月10日 日外アソシエーツ発行 紀伊國屋書店発売)である。日本のプロレタリア文学運動に多少とも参加した人の翻訳も含めた全著書を五十音順に並べて、それに全部通し番号をふってある。これ以外にみつからない本は絶対にありませんよ、と宣言しているようなもの。自費出版されたのを含めると際限がなくなる詩集、歌

集、句集を除いた、原則として明治期より昭和20年までのプロレタリア文学関係の単行書の全冊数は、2511冊を数える。この博搜精査ぶりは尋常でない。気の遠くなるような熱意に支えられた本物の書誌学ここにあり、という以外に適当なことばがみあたらない。浦西書誌学はつねに臨戦態勢にある周到な陣構えを真骨頂とするので、その筆法は、迫力をますことはあっても、堅実な歩調をゆるめることはないと思いたい。

16 おわりに

書誌づくりの心構えについて、自戒をこめつつ少しばかり。過剰なまでの完璧主義はグロテスクである。ほどほどのところで仕事の手を放すのも大切なコツであろう。自分ひとりでなにかも全部なしとげようとする、行き詰まってしまうし、いつまでも終らない。精も根も尽き果てかねないがけっぴりの半歩手前で、つまさきだちしながら、きりをつけることができれば、申し分ないだろう。あとは運まかせである。

持っていないものは持っていない、見ていないものは見ていない、知らないものは知らない、とはっきりした態度をとるべし。ごまかしはいちばんよろしくない。誠実な仕事には、必ず強力な援軍があらわれるはずである。

ひとすじの道をつき進むのはすばらしいことだが、寄り道にうつつをぬかし、裏道にまぎれこみ、脇道にそれるのもまたたのしからずや、の遊び心も忘れてたくない。おのれの移り気に身をまかせ、気分転換をはかるのも藝のうちだろう。あれこれやりちらかして、新しいスタイルを模索することによって、地力が飛躍的に増大するかもしれない。

なんであれ、書誌というものを堅苦しくとらえずぎると、作業がじめじめとうっとうしくなり、ふさぎの虫の思うつぼである。明朗にこしらえられた書誌は読んでいて、ほんとうに気持ちのよいものである。個人であれ図書館であれ、物心両面において、けちくさい料簡にしばられていると、ろくなことはない。未練がましいものねだりは大失敗のもとだが、いつのときも、書誌づくりは気前よく、気長にやるのがいちばんである。

(やまの ひろし 法学部教授)